

どうぶつ基金と協定締結

新年度月300頭手術へ予算計上

市は18日、どうぶつ基金(兵庫県芦屋市、佐上邦久理事長)とエナジーメントパートナー協定を締結した。今後、飼い主のいない猫等の繁殖抑制などに連携して取り組む。

喜岐市は2024年7月から同基金が発行する「無料チケット」を使って野良猫の不妊手術に取組んできた。昨年9月には同基金に獣医師の派遣を



協定を結んだ佐上理事長(右)と篠原市長

た篠原一生市長に「10日間に増やして年間3千頭のペースでできる。喜岐市側の人材と予算の確保が不可欠」と協力を求めていた。

市は、新年度予算案にスベイカーと獣医師の派遣費用、手術会場費用など計36万9千円を計上。協力姿勢を明確にし

た。協定の締結式で佐上理事長は「(手術の)取り残しがあると、1頭の雌猫が1回に5、6頭の出産を年に2、3回繰り返すと2、3年で2千頭ぐらいいなる。市と私たちと一丸となって、一気に解決すると世界に誇れるケーススタディ(事例)となる。よろしくお願ひします」と述べた。

篠原市長は「猫の繁殖力に対して年間100頭では砂漠に水を撒いているようなものでなかなか解決には至らない。本気で課題を解決していきたい。喜岐はイエネコ発祥の地でもあり、SDGs未来都市の第1号でもある。人と動物の共生は難しい課題だが、両者で手を取り合えば実現できると思う。引き続きよろしくお願ひします」と述べた。

ボランティアに高校生も参加

2月の手術会場となった西辺町の「旧しんぎょねん」では、一般ボランティアに加え、高校生のボランティア5人が参加。ほかのボランティアに作業方法や野良猫が置かれて現状を教えるも

喜岐商業高校情報処理科の1年、高尾ま花さんは友人と参加し、手術を持つ猫の待機所のシートを変えたり、手術後の器具の消毒を手伝った。



手術室を消毒する高尾さん(左)

手伝った。自宅西辺にも人に慣れた野良猫が多くいて、普段からふれ合う機会も多いそう。「辛い思いをしている猫を減らしたい」と思い参加した。

県外の方(どうぶつ基金)から支援をいただき感謝したいし、その思いに込められるよう頑張りたい」と意気込む。

また、喜岐高校3年の西村裕也さんは、スベイカーの獣医師に猫を渡す手伝いをした。幼い頃から動物が好きで、獣医を志



獣医師に猫を渡す西村さん(中央)

「普段の暮らしの中で猫の現実を知ることには少ないが、ボランティアに参加することで猫の置かれた現状もわかり、接し方も変わる。いい経験だ」と思ったと話した。

また、喜岐高校3年の西村裕也さんは、スベイカーの獣医師に猫を渡す手伝いをした。幼い頃から動物が好きで、獣医を志

「猫が多いとは知っていたが、いろんな声、大きさの猫がいて、初めて現場を目の当たりにして驚きとショックを感じた。(車に)乗かれても驚かされた。自分も獣医になって貢献したい」と話した。